

◆伊藤洋二 選 ～「詰んじたい俳句88」～

鷹羽狩行(監修) 片山由美子(文) 石飛博光(書) 二〇〇五年 日本放送出版協会

去年今年貫く棒の如きもの

高浜虚子

約一尺の棒状の麩に黒く色づけた砂糖と餡を染ませた麩菓子の甘さが懐かしい。十円玉を握りしめて走ったものだ。「おばさん、一本ちょうだい」。手づかみで齧りついた時の、あのサクサクとした歯ごたえ。今日食べるのは半分だけにする。残り半分は秘密の宝箱に隠す。楽しみは後に残す性分である。余韻が舌先に残る。もう半分の夢をみつつ、「去年今年麩菓子の棒の如きもの」。

春暁やひとこそ知らね木々の雨

日野草城

五日に一句のペースでこの文章を書くことにしている。戯言を綴るのは「脳活」に打って付けだが、今回の名句は難解である。ポイントは「ひとこそ知らね」。百人一首の九十二番、女房三十六歌仙の一人、二条院讃岐の歌、「わが袖は 汐干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし」を思い出す。ふと外を見れば、雨に濡れた紫陽花の蕾が、涙ぐんでいるように見える。

花種蒔く土の眠りを覚ましつつ

古賀まり子

愛媛県西条市、当地のお国自慢に「うちぬき」と云う自噴井がある。その源は石鎚山系北壁に発し、春には雪が融けて海へと流れ、トラクターのキュンブルルルが轟く。土の眠りを覚まして代掻きも始まる。粃播きから新米までの約半年、米は八十八の手間を掛けてつくられる。「いち粒を万倍せんと春田打ち」。

プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ

石田波郷

プラタナスは、すずかけ(篠懸、鈴掛)のこと。灰田勝彦さんの歌謡曲で「鈴懸の径」は、昭和十七年に発表された名曲。校庭のプラタナスの、色っぽい独特な臭いが漂っていたことを思い出した。

子供の目小さくなりし靴幾つ

林 翔

物置には、子ども達がよちよち歩きの頃のズック靴がある。孫が夏休みに来た時に履く赤いサンダルもある。私の革靴は、毎日が日曜となってから埃まみれ

で出不精となった。来月の句会には必ず真面目に出席せねば。

子にみやげなき秋の夜の肩ぐるま 能村登四郎

その昔の記憶。接待がやっと三軒目で終わった。嫌いではないが続くときつい。明日は運動会で一緒に登園しなければならない。午前一時だ、早く帰ろう。かつて子どもを乗せた、若かりしあの頃の肩も、今は肩コリ、五十肩。

寒晴やあはれ舞妓の背の高き 飯島晴子

西国三十三観音霊場、十六番札所、清水寺へ京都駅から歩く。高瀬川沿いに先斗町界限へ鴨川を渡り京町家を東入る。新入りらしき舞妓はんとすれ違う。お稽古おきばりやす。学生時代の修学旅行を思い出す。同級生達の懐かしい童顔、淡き恋心を抱いた、あのバスガイドさん。「松風や音羽の滝の清水をむすぶ心はずしかるらん」。いくたびも古都の崇さを尋ねたい。

大初日海はなれんとしてゆらぐ 上村占魚

大初日と太平洋との物語を思い付きました。浪曲調でつくりました。「まあ、待った待った待った。ここは神あらたかな名地。ここで喧嘩しちゃあいけねえ。そう言われて太平洋は、後へさがつて大初日のお尻をポンと叩いた。ここは下がるがその代わり、俺あ夕方には引き込むから覚悟しな。初日は黙ってうんと頷いた」。お日様と水平線が手打ち式。兄弟分の盃をしたそうな。

◆日根野聖子 選

滑稽俳句協会三月号（第一〇二号）の氏家頼一さんの俳句、「多羅葉に字を書けとこそ彼岸寺」。この「多羅葉」をご存知でしょうか。タラバ？カニのこと？いえ、「タラヨウ」と読み、植物です。古代インドで手紙や文章を書くのに用いたタラジュ（多羅樹）にあやかってタラヨウ（多羅葉）と名付けられたそうです。タラヨウの葉の裏に先の尖ったもので傷をつけると黒変し、文字を書くことができます。まさに「葉書」「言葉」です。氏家さんの俳句を拝見するまで多羅葉を知らず、氏家さんに「勉強になりました」とご連絡したところ、実物の葉っぱを送って下さったのでした。爪楊枝で書いてみました。

